

DRI 調査レポート No.7, 2004

平成 16 年 7 月 福井豪雨災害 調査報告（速報）

災害概要

活発な梅雨前線が北陸地方をゆっくり南下したのに伴い、7月18日朝から昼前にかけて福井県嶺北北部を中心に猛烈な雨が降り、美山町では総降水量が285ミリ、福井市で198ミリに達する雨が観測された。これにより、福井県下で、死者3名、行方不明者2名、福井市を含む2市3町に災害救助法が適用される豪雨災害となった。

人と防災未来センターでは、発災から4日目、およそ72時間後の7月21日午前に現地に平山修久専任研究員、伊藤ゆかり専任研究員、村田昌彦事業課長を派遣し、被害状況の調査を行った。

調査概要

日程：平成16年7月21日（水）

メンバー：平山修久専任研究員、伊藤ゆかり専任研究員、村田昌彦事業課長

調査行程：

- 10:30 福井県県民生活部危機対策・防災課
- 12:00 福井県足羽郡美山町
- 14:00 福井県福井市安波賀町地区
- 15:20 福井県福井市春日・木田・みのり地区
- 17:45 福井市総務部総合防災室（災害対策本部）

被害概要（7月22日12時現在、内閣府、平成16年7月福井豪雨による被害状況について（第11報））

河川

破堤・越水 11箇所

避難

避難指示 13,000世帯以上

避難勧告 42,500世帯（概数）

人的被害

死者 3人

行方不明 2人

負傷者 15人

建物被害

全壊 71棟

半壊 159棟

一部損壊 78棟

床上浸水 4,225棟

床下浸水 8,105棟

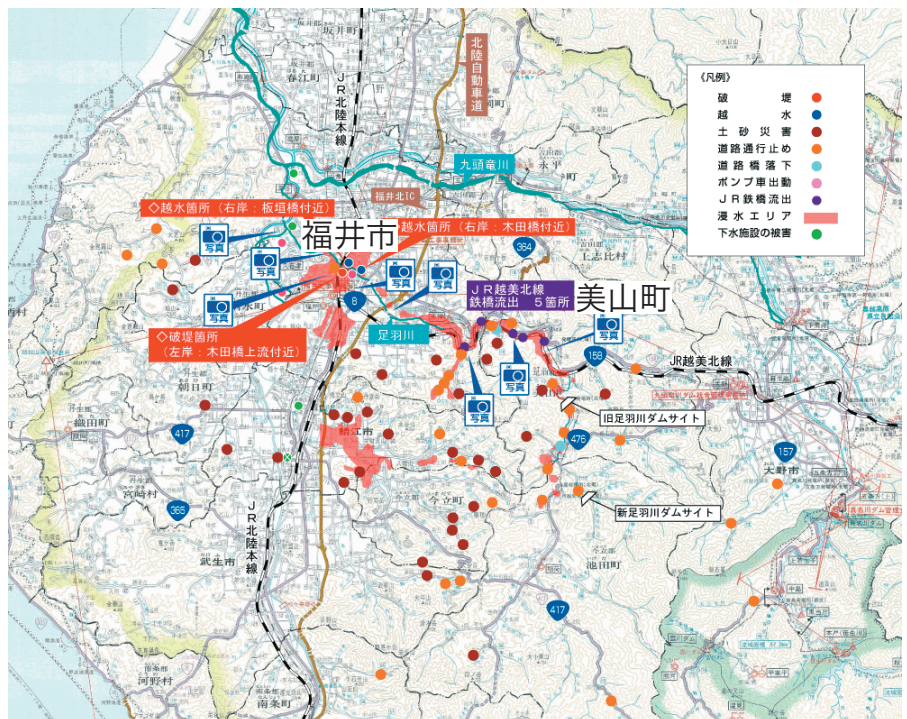


図-1 平成16年7月福井豪雨災害被害概要

（国土交通省 近畿地方整備局）

調査内容

(1) 福井県県民生活部危機対策・防災課

福井県における防災は県民生活部危機対策・防災課が担当している。災害対策本部会議の合間を縫って話を聞くことができた。

18日朝の段階では、福井県美山町役場が浸水するなど、情報の錯綜、混乱が生じたが、現在は県内の各市町との連絡体制は十分確保できている。美山町では、土砂崩れによる道路の寸断により21日9時現在においても孤立地域があり、県が中心となって防災ヘリによる救援物資搬送を実施している。現在は、福井県内の2市3町に災害救助法が適用されたため、県では被害情報の収集を行い、被災者生活再建支援法等の被災者支援策について検討をしているとのことであった。



図-2 福井県災害対策本部

(2) 福井県足羽郡美山町

この地域は、今回の豪雨災害のなかでも甚大な被害が生じている。JR越美北線の足羽川を渡るいくつかの鉄橋が橋脚もろとも流失していたり(図-3)、破堤あるいは溢水した泥流により田畑、住居あるいは倉庫が被害を受ける(図-4、5、6)など、泥流の威力のすさまじさを感じさせる。また、美山町役場周辺においては浸水の後が生々しく残されており、その泥土の堆積量は想像を超えるものである(図-7)。

この地域を訪れた時には、道路や建物に堆積した泥を撤去しているところであり、水が引いた後の後片づけの作業に追われていた。しかしながら、現地ボランティアセンターではボランティアの受け入れを行っているが、JR越美北線の復旧の目処が立っていないこと、この地域への交通手段が自動車しかないこと、さらに、ボランティアコーディネーターが不足していることなどから、現地では人手が足りない状況であった。地元の住民からの聞き取り調査によると、排水溝が泥土で閉塞し排水が溢れてしまうために、清掃のための水を使えず、また生活排水を流すことができないとのことであった。



図-3 流失した JR 越美北線の鉄橋



図-4 足羽川の破堤により被災した水田



図-5 被災した JR 越美北線

(3) 福井県福井市安波賀町地区

この地域は、福井市での足羽川最上流域にあたり、足羽郡美山町と隣接している。また、足羽川と一乗谷川とが合流する地点でもある。今回の豪雨災害の中でも、大きな被害が生じている。足羽川左岸沿いに位置する安波賀中島町の集落では、足羽川左岸堤防が約150mにわたり決壊したことにより被害が生じている。ここでは、JR越美北線の鉄橋が破壊される、泥水の流れた方向に電柱などが倒れる、住宅に被



図-6 足羽川の溢水により被災した美山町の住居



図-7 泥土により機能しなくなった排水溝

害が生じる（図-8）など、泥流の威力のすさまじさを感じさせる。また、一乗谷川が足羽川と合流する地域では、一乗谷川上流域で発生した土石流によって流された泥土が泥流となり一乗谷川の左岸堤防を溢水し、1階の屋根近くまで浸水するなど大きな被害が生じている（図-9）。

この地域を訪れた時には、重機を使用しての道路に堆積した泥土の撤去、住居内からの泥土の搬出、被災家屋の後片づけが進められているところであった。また、災害ごみは公園に集められていたが、田畑にて災害ごみを焼却処分しているところも見られた（図-10）。

地元住民からの聞き取り調査（図-11）によると、7月18日朝、この集落の住民は、この地域の避難所となっている福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館に自動車で避難したが、水が一度引いたために、自動車を同資料館の駐車場に置いて一旦自宅に帰ったところ、足羽側左岸堤防が決壊し、あっという間に胸の高さ辺りまで泥流が流れ込み、避難に使用した自動車や流木が流れてくるなど大変危険な状態になった、ということであった。



図-8 足羽川の破堤により被災した安波賀町地区の住居



図-9 一乗谷川の溢水により被災した安波賀町地区の住宅



図-10 山間部における災害ごみの状況とその焼却処分



図-11 地元住民から聞き取り調査を行う調査団

(4) 福井県福井市春日・木田・みのり地区

この地域は、福井市街地南部で足羽川左岸に位置し、足羽川の支流である荒川と足羽川との合流地点からすこし上流側にあたる春日1丁目の足羽川左岸堤防が約35mにわたり決壊することにより、広範囲にわたって被害が生じている。破堤した箇所の周辺地域では、家屋にも深刻な被害が生じており、破堤による泥流の威力を感じさせる（図-12）。ここでの被害の特徴として、泥流による浸水被害と泥土の堆積があげられる。

JR 北陸本線の東側（足羽川の上流側）に位置する春日地区、木田地区は、JR 北陸本線が堤防のようになったことで、木田地区を中心として、JR 北陸本線の高さと同じ1.2m～1.5mの浸水があったものと考えられる。この地区を訪れた時、道路清掃車、散水車を使用して、道路に堆積した泥土の撤去作業が進められていた。また、浸水した家屋においては、浸水した畳、家財などの災害ごみの後片づけ、床下に堆積した泥の撤去が進められているところであった。しかしながら、作業が追いつかず、外部からの応援やボランティアなどのマンパワーが不足しているような状況であった。

地元の住民に直接話を伺ったところ、13時過ぎに足羽川左岸堤防が決壊したあとすぐに腰の高さ辺りまで泥水が浸水した、堤防が決壊した時点では災害情報が住民に十分届いていなかったため避難が完了しておらず、避難所の小学校までの道路はスノータイヤなど大型の災害ごみが流れてくるなど危険であったため近隣の家の中を通り抜けて避難所まで避難した、災害ごみの収集場所として公園が指定されているが、現在のところ無秩序に集められており（図-13）、道路の通行障害となっている、とのことであった。



図-12 足羽川の堤防の決壊により被災した福井市春日地区の住宅



図-13 福井市内の公園に集積された災害ごみ

JR 北陸本線の西側（足羽側の下流側）に位置するみのり地区、西木田地区は、道路アンダーパス形式により JR 北陸本線と立体交差している 3 本の道路から泥流が流れ込んできた（図-14）ことにより床上浸水、床下浸水の被害が生じている。この地区の住民からのヒアリングによると、JR 北陸本線と立体交差している道路から川のように泥流が流れ込み、1.2m ～ 1.5m 程度浸水したということであった（図-15）。また、排水溝が十分に機能しておらず、住居内から排出した泥土や災害ごみの衛生状態や臭気が心配であるとのことであった（図-16）。



図-14 福井市みのり地区における JR 北陸本線との立体交差



図-15 福井市みのり地区の浸水状況

(5) 福井市総務部総合防災室

福井市における防災は総務部総合防災室が担当している。災害対策本部会議の合間を縫ってヒアリングすることができた。

現在、災害対策本部では、様々な情報の収集と集約を行っていた。福井市においては一乗地区に大きな被害が生じていること、一乗谷川上流域では土石流が発生していること、市職員が現地を回るなどして被害の全体像の把握を行っているということであった。



図-16 福井市みのり地区における災害ごみ

まとめ

水害後の災害廃棄物の処理方法について、現状では各市町村の判断によるところが大きく、平常時の対応マニュアルしか存在しない。このため、今回の豪雨災害においては、市街地では公園に災害ごみが集積されていたが、人手が不足している地区では道路に積み上げられていたり、農村部では焼却処分されているなどしていた。また、今後は、衛生管理の観点からも、復旧へ向けての市民の活力を引き出すためにも、水害後の災害廃棄物をいかに迅速に適正に処理するかについて、家電リサイクル法等の法制度をも含めてその手法およびマニュアルの検討を行う必要があると考える。

地元住民のヒアリングを通じてわかったことであるが、水害に対して安全な場所が避難所であるとは必ずしもいえないことから、災害のハザードと避難所との関係について改めて検討する必要があるであろう。

今回の災害の特徴として、泥土による被害があげられ、膨大な量の泥土が市街地に流入しており、浸水した家屋における泥の撤去作業には多くの人手が必要であるといえる。阪神・淡路大震災以降、被災地での災害ボランティア活動が常態化し、今回の災害においても、現地では水害ボランティアセンターが開設されていたが、まだまだ人手が不足している感があった。これは直前に平成 16 年 7 月新潟・福島豪雨災害があり、今回の災害が時間的に後であったことと関係があると考えられる。今後、時間差で生じる大きな災害の被災地に対して、外部応援やボランティア活動をどのように行っていくかについて改めて検討していくことが必要であるといえる。

被災者の方々にはお見舞い申し上げ、一日も早い復興の実現をお祈り申し上げるとともに、調査にご協力いただいたすべての方々に御礼を申し上げて本報告の結びとしたい。

DRI 調査レポート No.7, 2004



財団法人 阪神・淡路大震災記念協会
人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2
TEL: 078-262-5060, FAX: 078-262-5082